

分野		専門分野	担当者（職種）	田中和代（専任教員）
授業科目		看護学概論	実務経験	有（医療機関に 10 年以上勤務）
			単位数（時間数）	1 単位（30 時間）
対象学年・学期		1 学年・前期	DP との関連	DP1～5
授業の目的	看護を学ぶ第一歩として、看護の概念を理解し、看護の役割と機能について学ぶとともに、看護に対する自己の考え方を育てる。			
授業の概要	看護の歴史的変遷や人間・健康について学び、看護理論家の考えを知ることを通して、看護の概念、看護の役割と機能について理解する。看護職の養成制度や看護サービス提供の場についても学ぶ。 さまざまな視点から看護を学ぶことで、自己の看護観の土台を明確にし、さらに自己の看護を迫及し看護に対する考え方を育てていくことができるようにする。			
授業計画（回・内容・授業形態）	「看護の歴史的変遷」および「看護理論」については、グループワーク・発表を取り入れ、別途グループ学習の時間を設ける。第6、7、11、13、14回は、事前学習課題に取り組み、授業の最後に確認テストを行う。授業後には、授業内容に該当するテキストの範囲を復習すること。			
	1～2回	看護とは 1.看護を考える（導入） 2.看護の定義	講義	
	3～5回	看護の歴史的変遷 1.職業としての看護のはじまり 2.職業としての看護の確立 3.職業としての看護の充実4.職業としての看護の発展と新たな展開	講義・演習	
	6回	看護の対象者 1.看護の対象としての人間	講義	
	7回	看護における健康 1.健康のとらえ方 2.健康に影響する要因	講義	
	8 ～ 10 回	看護理論 1.看護理論の発達2.主な看護理論家とその理論概要3.看護理論演習	講義・演習	
	11回	看護の役割と機能 1.看護の役割と機能 2.看護業務と法律	講義	
	12回	看護における倫理 1.看護倫理とは 2.看護職の倫理綱領	講義	
	13回	看護の提供者 1.看護職の資格と養成制度2.看護職者の就業状況3.看護職の養成制度の課題	講義	
	14回	看護サービス提供の場 1.看護サービスの担い手とチーム医療 2.看護サービス提供の場	講義	
15回	まとめ・筆記試験			
使用テキスト		系統看護学講座 専門分野 基礎看護学 [1] 看護学概論 医学書院 黒田裕子監：やさしく学ぶ看護理論（改訂 4 版）日総研 峰村淳子，石塚睦子：よくわかる看護職の倫理綱領（第 3 版）照林社		
参考図書		系統看護学講座 別巻 看護史 医学書院／看護覚え書き（新装版）日本看護協会出版会／看護の基本となるもの 日本看護協会出版会／看護理論家の著書／私たちの拠りどころ保健師助産師看護師法（第 2 版）日本看護協会出版会		
評価方法		グループワーク・発表 20%、レポート 20%、筆記試験 60%の総合評価 ※授業科目の授業時間数 2/3 以上の出席にて受験資格あり。但し、出席時間数が基準に達しない場合は、補習等により修了していること。60 点以上を合格とする。		
履修上の注意		抽象的な内容なので、授業中にもよく考え、参考図書を読むなど、主体的に参加してほしい。また、事前・事後学習やグループワークに積極的に取り組みましょう。		

分野		専門分野	担当者（職種）	田中和代（専任教員）
授業科目		看護キャリアの形成	実務経験	有（医療機関に 10 年以上勤務）
			単位数（時間数）	1 単位（15 時間）
対象学年・学期		1 学年・前期	DP との関連	DP5
授業の目的	理想の看護師像を明確にし、専門職業人として自己研鑽していく必要性を学ぶことを目的とする。			
授業の概要	講義において、専門職とは何かを理解する。次に、さまざまな看護専門職について調べたり、看護の第一線で活躍する認定看護師から話を聞いたりして、看護の価値について考える機会をもつ。理想の看護師像を明確にし、自己のキャリアについて考えられるよう、自己理解の機会やグループワーク・プレゼンテーションの機会を取り入れる。授業全体を通して、専門職業人として自己研鑽していく必要性に気づく機会とする。			
	1 回	専門職とは 1）看護専門職と自己研鑽 2）キャリアとは 3）社会人基礎力	【講義】 ＜授業後＞振り返りシート①、社会人基礎力の自己評価（課題）を提出する	
	2 回	看護職としてのキャリアの将来像 1）さまざまな看護専門職の特徴と役割	【演習】グループワーク・プレゼンテーション ＜授業後＞振り返りシート②を提出する	
	3 回～ 4 回	2）先輩のキャリアから学ぶ	【講義】認定看護師 2 名（協力者） ＜授業後＞振り返りシート③④を提出する	
	5 回 6 回	理想の看護師像 1）理想の看護師像の明確化 2）自己理解 3）身につける必要があるスキル	【演習】プレゼンテーション・意見交換 ＜授業前＞理想の看護師像についてプレゼンテーションできるように準備しておく ＜授業後＞振り返りシート⑤、キャリア・プラン作成補助シートを提出する	
	7 回	自己のキャリアプラン 1）自己のキャリアプラン・ゴールシートの作成と発表	【演習】プレゼンテーション ＜授業前＞キャリアプランとゴールシートを作成しプレゼンテーションできるように準備しておく ＜授業後＞振り返りシート⑥、ゴールシートを提出する	
	8 回 (1 時間)	まとめ 1）キャリア理論 2）まとめ	【講義】	
	*各回の授業前に振り返りシートに各自の授業の目標を書いてくる ＜最終＞理想の看護師像のレポート、ゴールシートを提出する			
	使用テキスト	系統看護学講座 専門分野 基礎看護学〔1〕 看護学概論 医学書院		
参考図書				
評価方法	振り返りシート（60％）、理想の看護師像レポート（25％）、ゴールシート（15％）の総合評価 ※授業科目の授業時間数 2/3 以上の出席にて受験資格あり。但し、出席時間数が基準に達しない場合は、補習等により修了していること。60 点以上を合格とする。			
履修上の注意	A4 サイズのクリアポケットファイル（20 ポケット程度）、付箋（75×75 mm、75×25 mm サイズ）を準備する。 さまざまな看護専門職の特徴と役割について調べたり、自己のキャリアプランを考える際には、紹介する文献を活用してください。			

分野		専門分野	担当者（職種）	小川貴之（専任教員）
授業科目		基本技術	実務経験	有（医療機関に5年以上勤務）
			単位数（時間数）	1単位（30時間）
対象学年・学期		1学年・前期	DPとの関連	DP1～5
授業の目的	・看護を展開するのに必要なコミュニケーションの重要性と方法について理解することを目的とする。 ・看護における感染予防の基本的知識を理解し、感染経路への対策として、手洗いの方法・ガウンテクニックの方法・無菌操作・滅菌手袋の装着ができるようになることを目的とする。			
授業の概要	コミュニケーションでは、講義を通してコミュニケーションに関する基礎知識を学ぶ。また、実際のコミュニケーションを通し、プロセスレコードの記述方法を学ぶ。 感染予防では、講義を通して感染や感染予防に関する基礎知識について学ぶ。演習では感染予防のために必要な基礎的看護技術を実施し身につける。			
授業計画（回・内容・授業形態）	1回 1. コミュニケーションの意義と目的 【講義】 2. コミュニケーションの構成要素と成立過程 3. 関係構築のためのコミュニケーション 2回 1. 効果的なコミュニケーションの実際 【講義】 1) 傾聴の技術 2) 情報収集の技術 3) 説明の技術 4) アサーティブネス 2. コミュニケーション障害への対応 3回 プロセスレコードとは 【講義】 4回 プロセスレコードからの振り返り【演習】 5回 1. 感染とその予防の基礎知識 【講義】 2. 標準予防策（スタンダードプリコーション） 6・7回 衛生的手洗い・滅菌手袋の着脱 【演習】 8回 1. 感染経路別予防策 【講義】 2. 洗浄・消毒・滅菌 9・10回 1. 無菌操作 【講義】 2. 感染性廃棄物の取り扱い 3. 針刺し防止策 4. 医療施設における感染管理 11・12回 無菌操作・使用した器具の感染防止の取り扱い・感染性廃棄物の取り扱い【演習】 13回 筆記試験 14・15回 実技試験：衛生的手洗い・無菌操作			
使用テキスト	系統看護学講座 専門分野Ⅰ 基礎看護学〔2〕基礎看護技術Ⅰ 医学書院 看護がみえる vol.1 メディックメディア			
参考図書				
評価方法	筆記試験 60% 実技試験 40%の100%で評価する。 ※授業科目の授業時間数 2/3 以上の出席にて受験資格あり。但し、出席時間数が基準に達しない場合は、補習等により修了していること。60点以上を合格とする。			
履修上の注意	・予習をして授業に臨みましょう。 ・技術の習得は、自己学習の時間も活用し繰り返し練習しましょう。 ・演習時は服装を整えて臨みましょう。			

分野		専門分野	担当者（職種）	内村彰子（専任教員）	
授業科目		対象把握の技術	実務経験	有（医療機関に 15 年以上勤務）	
			単位数（時間数）	1 単位（30 時間）	
対象学年・学期		1 学年・後期	DP との関連	DP1～5	
授業の目的	・ヘルスアセスメントの意義と目的を理解し、対象把握に必要とされる技術を学ぶことを目的とする。 ・フィジカルアセスメントを通して得られた情報をアセスメントできる能力を養うことを目的とする。				
授業の概要	講義では、既習の解剖生理病態学を想起させながら、対象の状態を把握するために必要な知識を学習する。次に、演習では、健康歴聴取、呼吸音・心音・腸音の聴取、バイタルサイン（体温・脈拍・呼吸・血圧）測定などを行い、得られた情報をアセスメントできるようにする。また、技術習得の確認として、バイタルサイン測定、呼吸音の聴取を行う。				
授業計画（回・内容・授業形態）	1 回	1. ヘルスアセスメント 1) ヘルスアセスメントがもつ意味 2) ヘルスアセスメントにおける観察 2. フィジカルアセスメントに必要な技術 1) 視診・触診・聴診・打診の技術	【講義】		
	2・3 回	バイタルサイン測定（演習）	【演習（個別指導）】		
	4 回	3. 身体計測 1) 身体計測（身長・体重・腹囲・胸囲）の目的、方法および根拠・留意点	※授業までに身長・体重・腹囲・胸囲測定についてルーズリーフにまとめておく。 【講義】		
	自己学習	Tシャツペインティング	【演習】 準備物あり。別紙確認		
	5 回	4. 系統別フィジカルアセスメント 1) 呼吸器系のフィジカルアセスメント ①呼吸音 ②呼吸数	【講義】 ※呼吸音・心音・腸音・バイタルサイン測定の方法は,DVD を視聴しまとめておく。 ※聴診器持参 ※呼吸音・心音・腸音については、モデル人形も使用可		
	6 回	2) 循環器系のフィジカルアセスメント ①心音 ②体温 ③脈拍 ④血圧			
	7 回	3) 消化器系のフィジカルアセスメント ①腸音			
	8 回	4) フィジカルアセスメントの実際 ①呼吸音 ②心音 ③腸音	【演習】 ※聴診器持参		
	9 回 10 回 自己学習	実技試験 ：バイタルサインの測定とアセスメント			
	11 回 12回	実技試験 ：フィジカルアセスメント（呼吸音）			
	13 回 自己学習	5. 健康歴とセルフケア能力のアセスメント 1) 問診（面接）の技術 2) 健康歴聴取の実際	【講義】 【演習（集団指導）】		
	14回	6. 体温調節の援助 1) 電法とは	【講義】		
	15回	まとめ・筆記試験			
	使用テキスト		① 系統看護学講座 専門 基礎看護技術Ⅰ 医学書院 ② 根拠と事故防止からみた基礎・臨床看護技術 医学書院		
	参考図書		写真でわかる看護のためのフィジカルアセスメント アドバンス インターメディカ		
評価方法		筆記試験（50 点）と技術試験＜：バイタルサイン測定（25 点）、フィジカルアセスメント：（25 点）＞の総合 100 点で評価する。 ※授業科目の授業時間数 2/3 以上の出席にて受験資格あり。但し、出席時間数が基準に達			

	しない場合は、補習等により修了していること。60 点以上を合格とする。
履修上の注意	解剖生理病態学を復習し、体のしくみを考えながら臨みましょう。この科目で学習する技術は、対象把握に必要な最低限の技術であるため、確実な技術修得を目指し、繰り返し練習しましょう。

分野	専門分野	担当者（職種）	内村彰子（専任教員）
授業科目	日常生活援助技術Ⅰ （環境・清潔と衣生活）	実務経験	有（医療機関に15年以上勤務）
单元名	環境	単位数（時間数）	1単位 （30時間のうち14時間）
対象学年・学期	1学年・前期	DPとの関連	DP1～5
授業の目的	・生活環境の意義、環境の諸要素を知り、入院患者の生活環境における看護師の役割を理解できることを目的とする。 ・演習を通して、根拠に基づいたクローズドベッドの作成、臥床患者のシーツ交換ができるようになることを目的とする。		
授業の概要	・講義を通して、環境の意義や環境の諸要素、病床環境を知る。次に、室温、湿度、照度、騒音測定などを通して、実習室の環境をアセスメントし、グループで意見交換する機会を設ける。また、演習では、根拠を考えながら基本的なクローズドベッドを作成する。その後、患者役、看護師役を体験しながら、安全で安楽な臥床患者のシーツ交換を工夫しながら実施する。 ・講義や演習を通して、患者の心理に気づき、看護師の役割を考える機会とする。 ・技術習得として、クローズドベッドの作成は実技試験で確認する。		
授業計画（回・内容・授業形態）	1回 ・看護技術を学ぶにあたって 1.生活環境の意義 2.環境調整の基礎知識 1)療養生活の環境 2回 2. 環境調整の基礎知識 2)病室の環境のアセスメントと調整 ①病室・病床の選択 ②病床の構造設備基準 3)病室の環境 ①温度・湿度 ②光と音 ③色彩 ④臭気 ⑤人的環境 3回 1.環境のアセスメント 1)環境アセスメントと意見交換 ～実習室（病室）を使用して～ 4～ 1.病床の作り方と整備 5回 1)クローズドベッドの作成 6～ 1. 病床の作り方と整備 7回 2) 患者のリネン交換 3)ベッド周囲の環境整備 【講義】 【講義・演習（集団指導）】 ※課題提示あり 【演習：Gワーク・発表・意見交換／課題を用いて実施】 4～7回目 【演習（個別指導・集団指導）】 ※動画を視聴し、テキストも活用しながら、技術の目的、方法と根拠をまとめておくこと。まとめた物を活用し演習を行うこと 実技試験：クローズドベッドの作成		
使用テキスト	系統看護学講座 専門分野Ⅰ 基礎看護学〔2〕基礎看護技術Ⅰ 医学書院 系統看護学講座 専門分野Ⅰ 基礎看護学〔3〕基礎看護技術Ⅱ 医学書院 根拠と事故防止からみた基礎・臨床看護技術 医学書院		
参考図書	フロレンス・ナイティンゲール 小玉香津子他訳：看護覚え書 本当の看護とそうでない看護、日本看護協会出版会		
評価方法	筆記試験（25点）、実技試験（25点）の総合50点で評価し、実技試験での合格（60点以上/100点）は必須とする。 ※授業科目の授業時間数 2/3 以上の出席にて受験資格あり。但し、出席時間数が基準に達しない場合は、補習等により修了していること。60 点以上を合格とする。		
履修上の注意	環境調整に必要な基本的技術です。技術習得を目指し、繰り返し練習しましょう。		

分野		専門分野	担当者（職種）	内村彰子（専任教員）
授業科目		日常生活援助技術Ⅰ （環境・清潔と衣生活）	実務経験	有（医療機関に15年以上勤務）
单元名		清潔と衣生活	単位数（時間数）	1単位 （30時間のうち16時間）
対象学年・学期		1学年・前期	DPとの関連	DP1～5
授業の目的	・身体の清潔・衣生活の意義を知り、清潔援助の必要性を理解できるようになることを目的とする。 ・演習を通して、清潔援助が必要な対象に基本的な援助が実施できるよう、患者の心理と看護師の役割について考えること、根拠に基づいた清潔援助が実施できるようになることを目的とする。			
授業の概要	講義を通して、清潔援助、衣生活の意義を知り、清潔を保つ援助の種類・目的・方法と留意点を学習する。次に、講義で学習した知識を活用して、演習で、根拠に基づいた清潔援助（洗髪・全身清拭・寝衣交換・部分浴・陰部洗浄）を実施する。その際は、患者役、看護師役となることで、患者の気持ちに気づいたり、看護師の役割を考えたりする機会とする。			
授業計画（回・内容・授業形態）	1回 1. 清潔の意義 2. 衣生活の意義 3. 清潔援助の基礎知識 1) 皮膚・粘膜の構造と機能 2回 1. 清潔を保持する援助 1) 入浴・シャワー浴 2) 口腔ケア (1) アセスメント (2) 目的 (3) 方法①根拠および留意点 3～ 1. 清潔を保持する援助 4回 3) 洗髪 (1) アセスメント (2) 目的 (3) 方法①根拠および留意点 5～ 1. 清潔を保持する援助 6回 4) 全身清拭・寝衣交換 5) 整容 (1) アセスメント (2) 目的 (3) 方法①根拠および留意点 7回 1. 清潔を保持する援助 5) 陰部洗浄 (1) アセスメント (2) 目的 (3) 方法①根拠および留意点 8回 1. 清潔を保持する援助 6) 手浴・足浴 (1) アセスメント (2) 目的 (3) 方法①根拠および留意点		【講義】 ※テキストの該当箇所を読んでおく 【講義】 <u>※事前に各援助内容を動画視聴しておきましょう</u> 3～8回目 【講義・演習（集団指導）】 動画を視聴し、テキストも活用しながら、技術の目的、方法と根拠をまとめておくこと。まとめた物を活用し演習を行うこと	
	使用テキスト		系統看護学講座 専門分野Ⅰ 基礎看護学〔3〕基礎看護技術Ⅱ 医学書院 根拠と事故防止からみた基礎・臨床看護技術 医学書院	
参考図書				
評価方法		筆記試験（50点）で評価する。 但し、「清潔・衣生活」50点、「環境」50点で100点満点とする ※授業科目の授業時間数 2/3 以上の出席にて受験資格あり。但し、出席時間数が基準に達しない場合は、補習等により修了していること。60 点以上を合格とする。		
履修上の注意		事前にもどのように援助を行うのか、予習をしましょう。 「日常生活援助技術演習」につながる科目です。 1つ1つ根拠を考えながら練習しましょう。		

分野		専門分野	担当者（職種）	山口智世（専任教員）
授業科目		日常生活援助技術Ⅱ（食事・排泄・活動と休息）	実務経験	有 （医療機関に15年以上勤務）
单元名		食事	単位数（時間数）	1単位 （30時間のうち10時間）
対象学年・学期		1学年・前期	DPとの関連	DP1～5
授業の目的	・食事の意義を知り、栄養状態についてのアセスメントができるようになることを目的とする。 また、経口摂取ができない対象への食事摂取方法を理解できることを目的とする。 ・演習を通して、食事介助が必要な対象の心理と看護師の役割について考え、食事介助が必要な対象へ基本的な援助ができるようになることを目的とする。			
授業の概要	講義を通して、食事の意義を知り、まず自身の日頃の栄養摂取についてアセスメントする。 次に、演習では、学生同士で事例に合わせた食事介助を行い、さらにグループワークを通して、対象の心理と看護師の役割について気づく機会を持つ。食事摂取できない対象への食事摂取方法は視聴覚教材や模型を用いて、イメージできるようにする。			
授業計画（回・内容・授業形態）	1回 1.食事の意義 ①生理的意義 ②心理的意義 ③社会的・文化的意義 2.食事援助の基礎知識 1) 嚥下のしくみと消化吸収のしくみ 2) 摂食・嚥下能力のアセスメント		【講義】 ※教科書（解剖生理学）の消化器の解剖を確認しておくこと	
	2回 2.食事援助の基礎知識 1)栄養状態のアセスメント ①日本人の食事摂取基準 ②身体活動レベルに応じた推定エネルギー ③BMI		【講義・Gワーク】 ※テキストの該当箇所を読んでおくこと	
	3～4回 1.事例に合わせた食事介助 1)就床患者への食事介助 2)全盲患者への食事介助		【演習】 ※テキストの該当箇所を読み、動画を視聴しておくこと ※課題提出あり	
	5回 1.医療施設で提供される食事の種類と形態 2.非経口的栄養摂取の援助 1)経管栄養法 (1)目的 (2)方法 ①根拠および留意点		【講義・DVD視聴】 ※課題提出締切日	
使用テキスト		系統看護学講座 専門分野Ⅰ 基礎看護学〔3〕基礎看護技術Ⅱ 医学書院 看護がみえる vol.1 メディックメディア		
参考図書		小玉香津子、尾田葉子：フロレンス・ナイティンゲール 看護覚え書 本当の看護とそうでない看護 日本看護協会出版会		
評価方法		筆記試験40点とする。 科目としては、「食事」40点、「排泄」30点、「活動と休息」30点の総合100点で評価する。 ※授業科目の授業時間数2/3以上の出席にて受験資格あり。但し、出席時間数が基準に達しない場合は、補習等により修了していること。60点以上を合格とする。		

分野	専門分野	担当者（職種）	内村彰子（専任教員）
授業科目	日常生活援助技術Ⅱ（食事・排泄・活動と休息）	実務経験	有（医療機関に15年以上勤務）
单元名	排泄	単位数（時間数）	1単位 （30時間のうち10時間）
対象学年・学期	1学年・前期	DPとの関連	DP1～5
授業の目的	・排泄の意義を知り、排泄のアセスメントができるようになることを目的とする ・演習を通して、排泄援助が必要な対象の心理と看護師の役割について考え、排泄援助が必要な対象へ根拠に基づいた基本的な援助が実施できるようになることを目的とする。		
授業の概要	講義を通して、排泄の意義を知る。また、排泄の正常・異常の理解を通して、学生自身の日頃の排泄状況をアセスメントしてもらう機会とする。演習では、患者役、看護師役を通して、排泄援助に伴う羞恥心など対象の心理面を知り、看護師の役割を考える。また、基本的な排泄援助として、便器・尿器を用いた床上排泄、ポータブルトイレの援助、おむつ交換を実施する。		
授業計画（回・内容・授業形態）	1回 1.排泄（排尿・排便）の意義 ①生理的意義 ②心理的意義 ③社会的・文化的意義 2.排泄援助の基礎知識 1)排泄のメカニズム ①尿の生成 ②排尿反射 ③性状 ①糞便の形成 ②排便反射 ③性状 2回 2.排泄援助の基礎知識 1)排泄のアセスメント ①排尿の正常 ②排便の正常 ③排泄に影響を与える因子 3回 1.排泄の援助 1)ポータブルトイレを使用した排泄の援助 2)便器・尿器を使用したベッド上での排泄 3)おむつのあて方 4回 1.排尿障害のある患者の援助 1)排尿障害とは ①頻尿 ②尿失禁 ③排尿困難 ④尿閉 2)排尿障害時の援助 ①一時的導尿 ②持続的導尿 5回 2.排便障害のある患者の援助 1)排便障害とは ①便秘 ②下痢 ③便失禁 2)便秘時の援助 【講義】 ※テキストで腎臓の解剖を確認しておくこと 【講義・Gワーク】 【演習（集団指導）】 ※動画を視聴し、テキストを活用しながら技術の目的、方法と根拠をまとめておくこと。まとめた物を活用し演習を行うこと 【講義】 ※テキストの該当箇所を読んでおくこと 【講義】 ※テキストの該当箇所を読んでおくこと		
使用テキスト	系統看護学講座 専門分野Ⅰ 基礎看護学〔3〕基礎看護技術Ⅱ 医学書院 根拠と事故防止からみた基礎・臨床看護技術 医学書院		
参考図書	小玉香津子, 尾田葉子: フロレンス・ナイティンゲール 看護覚え書 本当の看護とそうでない看護 日本看護協会出版会		
評価方法	筆記試験（30点）とする。 科目としては、「食事」40点、「排泄」30点、「活動と休息」30点の総合100点で評価する ※授業科目の授業時間数 2/3 以上の出席にて受験資格あり。但し、出席時間数が基準に達しない場合は、補習等により修了していること。60 点以上を合格とする。		
履修上の注意	演習では、対象者の立場に立ち、プライバシーの配慮を考えて行いましょう。		

分野		専門分野	担当者（職種）	山口智世（専任教員）
授業科目		日常生活援助技術Ⅱ（食事・排泄・活動と休息）	実務経験	有（医療機関に 15 年以上勤務）
单元名		活動と休息	単位数（時間数）	1 単位（30 時間のうち 10 時間）
対象学年・学期		1 学年・前期	DP との関連	DP1～5
授業の目的	・日常生活における活動・休息の意義を知り、看護の基本である安全・安楽について理解できることを目的とする。 ・演習を通して、人間の体のしくみを理解しながら、活動制限のある対象に生じる身体的・精神的苦痛を知り、活動制限のある対象への基本的な援助ができることを目的とする。			
授業の概要	講義を通して、人間の基本的ニーズである活動すること、休息することの意義を理解する。演習では、根拠を理解しながら、体位変換、ストレッチャー・車椅子の移乗・移送を実施する。また、課題を用いたグループワークや演習での患者役、看護師役の体験を通して、活動制限のある対象の心理を知り、看護師の役割を考える。			
授業計画（回・内容・授業形態）	1 回 1. 活動・休息の意義 2. 活動の基礎知識 1) よい姿勢 2) ボディメカニクス 3. 安全・安楽とは 1) 安全・安楽を阻害する因子 2) 看護行為における安全・安楽の援助 2 回 1. 睡眠・休息の基礎知識 2. 睡眠・休息への援助 1) 睡眠の生理 2) 睡眠への援助 3 回 1. 活動への援助 1) 人間の自然な動き 2) 体位変換（側臥位、座位、端座位） 4～5 回 1. 活動への援助 1) 車椅子への移乗・移送 2) ストレッチャーへの移乗・移送			【講義】 ※テキストの該当箇所を読んでおくこと 【講義】 ※テキストの該当箇所を読んでおくこと 3～5 回目 【演習（集団指導）】 ※動画を視聴し、テキストも活用しながら技術の目的、方法と根拠をまとめておくこと。まとめた物を活用し演習を行うこと
使用テキスト	系統看護学講座 専門分野Ⅰ 基礎看護学〔3〕基礎看護技術Ⅱ 医学書院 看護がみえる vol.1 メディックメディア			
参考図書	小玉香津子, 尾田葉子：フロレンス・ナイティンゲール 看護覚え書 本当の看護とそうでない看護 日本看護協会出版会			
評価方法	筆記試験（30点）とする。 科目としては、「食事」40点、「排泄」30点、「活動と休息」30点の総合100点で評価する。 ※授業科目の授業時間数 2/3 以上の出席にて受験資格あり。但し、出席時間数が基準に達しない場合は、補習等により修了していること。60 点以上を合格とする。			
履修上の注意	演習では、対象者の安全に注意しながら行いましょう。			

分野		専門分野	担当者（職種）	内村彰子/小川貴之 （専任教員）
授業科目		日常生活援助技術演習	実務経験	有（医療機関に5年以上勤務）
			単位数（時間数）	1 単位（30 時間）
対象学年・学期		1 学年・後期	DP との関連	DP1～5
授業の目的	・学習した知識と技術を活用し、事例に応じた根拠に基づく日常生活の援助が実施できる。また、看護実践のリフレクションを行い、自己の看護実践についての課題を明確にすることを目的とする。			
授業の概要	・前期に学習した日常生活援助技術を組み合わせて、事例の提示場面に応じた日常生活援助を実施できるように学習を進める。その際は、根拠を考えながら実施できるよう、援助計画を立て、さらにグループで話し合い、対象に合わせた援助方法を考えていく。また、演習の際は、患者役、看護師役を経験し、患者の心理面に気づく機会とする。また、技術修得の確認として、日常生活援助技術の試験を行い、実施後は自己の課題に気づけるよう、リフレクションの機会を設ける。			
授業計画（回・内容・授業形態）	1 回 1.対象に看護を実践する（看護技術を適用する）際に必要な考え方 ～ ・看護技術を適切に実践するための要素 2 回 〃 3 回 1.事例に応じた日常生活援助の実施 1)事例の提示 2)事例の読み取りと意見交換 4 回 3)援助計画書立案の方法と作成 ～ 5 回 〃 6 回 4)実施 ～ 11 回 〃 12～ 実技試験 ①洗髪：ケリーパッド（個人） ②全身清拭・寝衣交換（個人） 13 回 ③陰部洗浄・おむつ交換・リネン交換（ペア） 14～ 1.実施後のリフレクション 15回 〃			【講義】 【演習】 【講義】※課題提示あり 【講義・演習（Gワーク）】 6～11 回【演習・Gワーク】 ※援助計画書を活用し、適宜修正を行う 【演習・Gワーク】 ※リフレクションシート提出
使用テキスト	系統看護学講座 専門分野Ⅰ 基礎看護学〔2〕 基礎看護技術Ⅰ 医学書院 系統看護学講座 専門分野Ⅰ 基礎看護学〔3〕 基礎看護技術Ⅱ 医学書院 根拠と事故防止からみた基礎・臨床看護技術 医学書院			
参考図書				
評価方法	・事前学習・援助計画書(10%)、実技試験（80%）、リフレクションシート（10%）の100点満点で評価を行い、実技試験での合格（60点以上/100点）は必須とする。 ※授業科目の授業時間数 2/3 以上の出席にて受験資格あり。但し、出席時間数が基準に達しない場合は、補習等により修了していること。60 点以上を合格とする。			
履修上の注意	・学習した技術は、テキストや動画視聴、反復練習等で再確認してから演習に臨みましょう。 ・グループワークに臨む際の事前学習は必須です。 ・日常生活援助技術の修得に向けて、メンバーと協力しながら繰り返し練習に取り組みましょう。 ・授業内だけでは十分に練習ができないと思うので、自己学習や放課後を積極的に利用して、技術習得しましょう。			

分野	専門分野	担当者（職種）	薬師神真季（専任教員）
授業科目	診療の補助技術	実務経験	有（医療機関に5年以上勤務）
		単位数（時間数）	1単位（30時間）
対象学年・学期	2学年・前期	DPとの関連	DP1～5
授業の目的	対象の看護に必要な基本的な診療に伴う補助技術について学ぶ。		
授業の概要	診察および検査の介助時の看護師の役割を学ぶ。また、創傷管理技術、与薬の技術を学習し、看護師に必要な知識・技術を習得する。 講義では、診療の補助技術における基礎知識を学習する。次に演習では、包帯法、与薬の技術を根拠に基づいて実施できるよう、視聴覚教材や模型を用いて知識を確認しながら実施できる機会を確保する。静脈血採血については、モデル人形を用いた実技試験で確認する。		
授業計画（回・内容・授業形態）	1回	1. 診察・検査・処置における技術 1) 診察の介助 2) 検査・処置の介助 2. 呼吸・循環を整える技術 1) 酸素療法	【講義】
	2回	3. 創傷管理技術 1) 創傷管理の基礎知識 2) 包帯法（集団指導）	【講義】 【演習】包帯法
	3回	4. 症状・生体機能管理技術 1) 検体検査	【講義】
	4回	静脈血採血	【講義】
	5・6回	（個別指導）	【演習】静脈血採血
	7回	実技試験：静脈血採血	
	8回	5. 与薬の技術 1) 与薬の基礎知識 （1）薬物動態 （2）看護師の役割 ①正しい与薬 ②薬の管理（毒薬・劇薬・麻薬） 2) 援助の実際 ①経口与薬・口腔内与薬 ②経皮的与薬 ③直腸内与薬 ④その他	【講義】
	9・10回	（上記①②③個別指導）	【演習】与薬
	11回	3) 注射の基礎知識 （1）注射の方法の種類（2）注射の準備 （3）注射の実施法 ①皮下注射 ②皮内注射 ③筋肉内注射 ④静脈内注射 ⑤点滴静脈内注射・三方活栓	【講義】
	12回	注射の準備：薬液の吸い上げ（個別指導）	【演習】薬液の吸い上げ
	13・14回	注射の実際（上記①③④⑤個別指導）	【演習】各注射・点滴
	15回	筆記試験・まとめ	
使用テキスト	系統看護学講座 専門分野 基礎看護技術Ⅱ 医学書院 根拠と事故防止からみた基礎・臨床看護技術 医学書院		
評価方法	筆記試験（70点）、実技試験（30点）の総合100点で評価する。 ※授業科目の授業時間数2/3以上の出席にて受験資格あり。但し、出席時間数が基準に達しない場合は、補習等により修了していること。60点以上を合格とする。		
履修上の注意	・各演習前には課題がでます。しっかりと予習をして授業に臨みましょう。 ・技術の習得は、自己学習の時間や放課後を活用して繰り返し練習しましょう。 ・演習時は服装を整えて臨みましょう。		

分野		専門分野	担当者（職種）	小川貴之（専任教員）
授業科目		問題解決過程	実務経験	有（医療機関に5年以上勤務）
			単位数（時間数）	1単位（30時間）
対象学年・学期		2学年・前期	DPとの関連	DP1～5
授業の目的	看護実践の基盤となる問題解決過程や臨床判断などの思考を学習しながら、看護過程展開のプロセスを理解し、事例の対象に合わせた看護を展開できる能力を養うことを目的とする。			
授業の概要	講義では、看護過程の目的、構成要素(アセスメント、看護診断、計画の立案、実施、評価)を理解し、看護過程展開について学ぶ。演習では、ヘンダーソンの理論を用いて、紙上事例の対象に合わせた看護を展開する。その際は、個人ワークに加えてグループワークを活用し、対象に必要な看護を展開できるよう、他者の考え方も知りながら、発表や意見交換をとりいれる。さらに、授業全体を通して、看護実践の基盤となる問題解決過程の考え方を身につけられるようにする。			
授業計画（回・内容・授業形態）	1回 1.看護過程とは 1)看護過程の目的 2)看護過程の構成要素 ①アセスメント ②看護診断 ③計画の立案 ④実施 ⑤評価 2回 2.看護過程展開で基盤となる考え方 1)問題解決過程 2)臨床判断の考え方 3回 3.ヘンダーソンの理論を用いた看護過程の展開 ①情報収集 ・情報収集のためのヘンダーソンの3つの視点とその内容 ②情報の分類・整理、情報の分析 ③問題の推論・統合、仮説の検証 4～ <事例展開> 5回 1)アセスメント 6回 2)看護診断 (1)問題の特定、問題の優先順位の検討 (1)看護診断の種類 7～ 発表・意見交換（アセスメント・看護診断） 8回 ” 9回 3)関連図 10回 4)計画の立案 (1)目標の設定 (2)具体策の立案 11～ 発表・意見交換（計画の立案） 12回 ” 13回 4)実施 (1)経過記録 ①SOAP法 5)評価 (1)目標達成評価 (2)プロセス全体の評価 14回 実施・評価の実際 15回 筆記試験・まとめ			【講義】 【講義・演習（個人ワーク、Gワーク）】 【講義】 4～12回 【講義・演習（個人ワーク、Gワーク）】 【講義】 【演習（個人ワーク）】
使用テキスト	系統看護学講座 専門分野Ⅰ 基礎看護学〔2〕基礎看護技術Ⅰ 医学書院 看護過程を使ったヘンダーソン看護論の実践 ノーヴェルヒロカワ NANDA－Ⅰ看護診断 定義と分類 医学書院 看護がみえる vol.5 対象の理解Ⅰ			
参考図書				
評価方法	筆記試験(40点)、演習課題提出(60点)による総合評価とする ※授業科目の授業時間数 2/3 以上の出席にて受験資格あり。但し、出席時間数が基準に達			

	しない場合は、補習等により修了していること。60 点以上を合格とする。
履修上の注意	・看護を展開するために必要な看護過程のプロセスを学習する科目です。各回で提出された課題に取り組み授業に臨みましょう。また、基本的な考え方を理解できるよう、各回で学習した内容を必ず復習しましょう。 ・Gワークは課題を持参し臨むことで、他者の意見から学ぶことができます。 ・事例の動画をよく見て、対象把握しましょう。

分野		専門分野	担当者（職種）	内村彰子（専任教員）
授業科目		看護倫理	実務経験	有（医療機関に 15 年以上勤務）
			単位数（時間数）	1 単位（15 時間）
対象学年・学期		2 学年・後期	DP との関連	DP3
授業の目的	看護実践における倫理的な判断の重要性を理解し、倫理的問題に対処できる基礎的能力を養う。			
授業の概要	講義を通して、看護倫理を考えるための基盤となる倫理理論や重要概念、倫理的意思決定のプロセスなどを学ぶ。そのうえで、事例を通して問題に対する分析と対処法を考える。事例検討は、「4 ステップモデル」（小西）を用いてグループワークを行い、意見交換のプロセスを大切にする。			
授業計画（回・内容・授業形態）	開講前、提示する課題に取り組みレポートにまとめる。4～7回は、事前に提示する事例について情報の整理、分析をして授業に臨む。また、授業後は、グループワークや全体発表後の気づき・学び、自身の考える具体的な対処法をまとめる。授業内容をふまえて、倫理的看護実践を行うために必要なことについて自己の考えを整理し、レポートにまとめる。 1 回 看護倫理についての基礎知識 【講義】 1.看護倫理の基礎 2.看護倫理の歴史的推移 3.看護倫理の 3 つのアプローチ 2 回 看護倫理に関係する重要概念 【講義】 1.看護倫理に関係する重要概念 アドボカシー/インフォームド Consent/患者の権利/情報プライバシーと守秘義務 3 回 倫理的意思決定のプロセス 【講義】 1.看護実践における倫理的問題・ジレンマ 2.倫理的意思決定のプロセス 3.倫理的意思決定モデル 4・5 回 4 ステップモデルによる事例検討（1） 【演習・グループワーク】 1.事例検討グループワーク（事例：身体拘束） 2.全体発表・意見交換 6・7 回 4 ステップモデルによる事例検討（2） 【演習・グループワーク】 1.事例検討グループワーク（事例：人生の最終段階における医療） 2.全体発表・意見交換 8 回 筆記試験 【試験】			
使用テキスト	小西恵美子編：看護倫理（改訂第 3 版）よい看護・よい看護師への道しるべ 南江堂 系統看護学講座 専門分野 I 基礎看護学 [1] 看護学概論 医学書院 系統看護学講座 別巻 看護倫理 医学書院			
参考図書	事例検討の際に拠りどころとなる文献は授業中に提示する			
評価方法	事前課題レポート 20 点、4 ステップモデル 20 点、筆記試験 60 点の総合評価 ※授業科目の授業時間数 2/3 以上の出席にて受験資格あり。但し、出席時間数が基準に達しない場合は、補習等により修了していること。60 点以上を合格とする。			
履修上の注意	・「ICN 看護師の倫理綱領」（2012 年、1CN）、「看護職の倫理綱領」（2021 年、日本看護協会）に目を通して臨む ・事前課題として、基礎看護学実習 II で感じた倫理的問題・ジレンマをまとめる			

分野	専門分野	担当者（職種）	田中和代（専任教員）
授業科目	看護研究I （看護研究の基礎）	実務経験	有（医療機関に10年以上勤務）
		単位数（時間数）	1単位（15時間）
対象学年・学期	2学年・後期	DPとの関連	DP5
授業の目的	看護における研究の意義を理解し、看護研究の基礎を学ぶ。 科学的根拠に基づいた看護を実践するために、文献を活用し、批判的吟味をすることの重要性を理解し、探求心を養うことを目的とする。		
授業の概要	看護研究の基礎を講義で学び、文献検索、文献クリティークを演習する。それを踏まえて、各自がケーススタディ計画書を作成する。 3年次開講の「看護研究II（ケーススタディ）」における自己のケーススタディの実施に役立てる。		
授業計画（回・内容・授業形態）	看護研究の基礎的知識について小テストを実施する。授業後は、講義内容・配布資料をもとに、学習内容を復習すること。 1回 看護研究とは 【講義】 1. 看護研究の意義 2. 研究のプロセス 3. リサーチクエスチョン 2回 文献レビューとその方法 【講義・演習】 1. 文献レビューとその目的 2. 文献検索の方法 3. 文献クリティーク 4. 関心のあるテーマについて文献を検索し、文献を読み整理する ／事後；課題提出 3回 看護研究における倫理的配慮 【講義】 1. 研究における倫理的配慮の原則 2. 研究における依頼と同意 4回 研究デザイン 【講義】 1. 研究デザインの選択 2. 質的研究と量的研究の特徴 5回 文献のクリティーク 【演習】 ／事前；クリティークの視点で文献を読んでくる 6回 研究計画書の作成 【講義・演習】 7回 1. 研究計画書の書式と書き方 2. ケーススタディ計画書の作成 ／事後；課題提出 8回 まとめ、3年次ケーススタディの実施について （1時間）		
使用テキスト	系統看護学講座 別巻 看護研究 医学書院 松本孚, 森田夏実編：新版看護のためのわかりやすいケーススタディの進め方 照林社		
参考図書			
評価方法	小テスト60%、課題提出40%の総合評価 ※授業科目の授業時間数 2/3 以上の出席にて受験資格あり。但し、出席時間数が基準に達しない場合は、補習等により修了していること。60 点以上を合格とする。		
履修上の注意	3年生のケーススタディ発表会に参加する。その際の抄録を授業に持参する。		

分野	専門分野	担当者（職種）	田中和代 他全専任教員 （専任教員）
授業科目	看護研究Ⅱ （ケーススタディ）	実務経験	有（医療機関に10年以上勤務）
		単位数（時間数）	1単位（30時間）
対象学年・学期	3学年・前期	DPとの関連	DP5
授業の目的	ケーススタディの実践を通して研究のプロセスおよび研究的態度を学ぶ。		
授業の概要	2年次開講の「看護研究Ⅰ（看護研究の基礎）」を踏まえ、実習で受け持った事例についてケーススタディ計画書の作成からケースレポートを作成し発表するまでの一連のプロセスを実際に行う。		
授業計画（回・内容・授業形態）	授業後は、講義内容・配布資料をもとに学習内容を復習し、ケーススタディの実施に活用する。		
	1回	授業の概要 1. 看護研究Ⅰの振り返り 2. ケーススタディの意義とプロセス 3. ケーススタディオリエンテーション	講義
	2回	ケースレポートの構成と書き方 1. ケースレポートの構成と書き方 2. ケースレポートの実例	講義
	3回	ケーススタディの計画 1. 文献検索・文献検討、ケーススタディ計画書の作成	演習
	4回	ケーススタディの計画 1. ケーススタディ計画書の作成 （ケーススタディ担当教員による個別指導）	演習
	5回	研究成果の発表 1. 発表の意義 2. 口頭発表の準備 3. プレゼンテーションの評価基準	講義
	6回	発表の準備 1. ケーススタディ発表会オリエンテーション 2. ケースレポートの作成	演習
	7回	発表の準備 1. 発表原稿の準備と補助資料の作成	演習
	8～13回	ケーススタディ発表会 （口頭発表、質疑応答、講評）	演習
	14.15回	ケーススタディ評価・まとめ 1. 発表後の振り返り、まとめ、自己評価	演習・GW
使用テキスト	松本孚，森田夏実編：新版看護のためのわかりやすいケーススタディの進め方 照林社、系統看護学講座 別巻 看護研究 医学書院 その他必要時資料を配布する。		
参考図書	計画書やレポートを作成する際には各自で必要な文献を使用する。		
評価方法	レポート・発表・ケーススタディに取り組む姿勢について、ケーススタディ評価表に基づき評価する。 ※授業科目の授業時間数2/3以上の出席にて受験資格あり。但し、出席時間数が基準に達しない場合は、補習等により修了していること。60点以上を合格とする。		
履修上の注意	ケーススタディ担当教員と密に連絡を取り合い、指導・助言を受けながら計画的に進める。主体的・計画的に取り組み、実践を通して研究的な態度を習得してほしい。		